

災害支援ナース活動報告書

報告者：伊藤 具子

所属施設：三条総合病院

報告月日：令和6年2月5日

活動日	1月21日(日) ～ 1月24日(木)
活動場所	施設名 珠洲市正院小学校 避難所
活動内容	<p>金沢市内の前泊施設を出発し、マイクロバスで珠洲市へ向かった。対策本部を経由して進んでいくうちに、ひび割れや陥没で道は傾きバスは大きく揺れ、家屋は倒壊し景色は変わっていった。金沢市を出発し5時間後に正院小学校へ到着、4名の支援ナースで24時間体制3泊の活動を開始した。</p> <p>(CSCA) 先発ナースからの最小限の申し送りを受け、チャットワークや避難者1人ずつA4用紙に既往歴や避難経緯がまとめられた手書きのシート、要配慮者のピックアップや掃除のルールなどが記載されたノートから情報を収集した。避難所を巡回すると、裏山は崩れており海からも近く、体育館には水や毛布など物資が積み重ねられ、授業の再開で3階は小学校として機能し、1、2階の教室は避難者100名が生活をしていた。電気は復旧、灯油ストーブや暖房が稼働し、断水・排水不可でトイレは仮設かテント内にポータブルトイレを設置して袋をかけて使用ごとに凝固剤を入れてゴミ箱へ破棄していた。手洗いやうがいの排水も同様に段ボールに袋をかけて処理していた。有志団体による炊き出しと、仮設シャワー1基の設置、各部屋は10人前後で、ほとんどの避難者が段ボールベッドかテントで生活しており、換気は1日4回行われ、トイレには次亜塩素酸消毒液が、避難所内のいたるところにアルコール消毒液が設置されていた。</p> <p>超高齢地域で、避難者の多くが持病をもっており、発災前から放置していた高血圧症の悪化や、家族が被災し死亡や、病院へ搬送されて1人で避難所生活をされている方も多くいた。市内の医療機関は救急患者対応でひっ迫しており、開業医は被災し休診していた。PWJの巡回診察があり、診察や災害処方箋の依頼はできていた。</p> <p>(TTT)『避難生活の二次的合併症を防ぎ、健康状態を維持できるように支援する』ことを目標に活動した。避難者の健康状態の確認は、午前と午後に巡回をし、その後に支援ナースでカンファレンスをひらき、情報を整理した。避難所内のマップと名簿を作成し、巡回時には会話の中に避難者の名前を入れることで関係性の構築をはかった。症状に応じて市販薬を配布し、持参薬の不足や持病の悪化など災害関連死の兆候があれば、リーダーナースを通じてPWJやDPATへの診察や処方依頼、診察の介助、保健師会や薬剤師会と情報共有、状態の確認を繰り返した。避難者の感染意識は高く、手洗いやマスク着用の意識はされているが、外は寒く朝には手洗いタンクの水は凍り、消毒液には雪が積もっている日もあった。避難者は自宅の片付けや避難所生活の疲労で感染予防をしたくてもできない状況にあり、感染への不安から避難者がストレスを感じている場面もみられた。発熱者のCOVID19検査の実施、陽性者や同室者の健康状態の確認と精神的サポート、ゾーニングや消毒液交換など環境整備、リーダーナースを通じてDMATや本部会議へ感染状況の報告を行った。活動3日目、いつも「大丈夫」と話していた女性が、涙を流して支援ナースに声をかけてきた。他の避難者の言葉に傷つき、辛く眠れないと話されていた。パディのナースと一緒に避難者の話を聞き、肩をさすって気持ちが落ち着くまでそばに付き添った。翌日DPATの診察を受け、日赤ここのケアチームへ情報共有され、避難者の状態に応じて介入が受けられる準備ができた。</p> <p>既存の資料を更新し、要配慮者など避難者情報を後任へ引き継ぎ、活動を終了した。</p>

所 感

被災地への派遣要請がきた時、看護師として使命感を感じた。出発までの10日間、通常の業務をこなし携行品をそろえ、今までの研修資料を読み返して「強い使命感は避難者のニーズを見失う」という言葉に気づかされたり、「気負いしない」という言葉に励まされたりした。

避難所の学校には、小学生が作った正院新聞が壁に貼られ、感染予防の方法や炊き出しの情報が書かれていた。避難者は部屋毎に掃除当番を決めて、被災した先生が体操教室を開き、コミュニティ内で共助を感じる場面が多くあった。その一方で、他人同志が生活する非日常の環境の中で、些細な言葉や感染症の発症で避難所内の人間関係はこわれやすいとも感じた。フェーズや避難者の環境によって、求められる支援も変化しており、短い派遣期間で4名の支援ナースが協働し、潜在する問題を見つけ対応することが重要でした。

災害支援ナースの派遣を終えて、あの避難者は今どうしているだろうと考えて避難所のことを忘れたくないという気持ちと、日常に戻りたいという気持ちで自分が葛藤していることに気づいた。自分が避難者へ声をかけたように、周囲の人が自分に「眠れているか」と聞いてくれて、自分の災害派遣は周囲の協力のもとで成り立っていると強く感じた。まずはクールダウンをして、今後は学生や看護師への活動報告や、研究に取り組むなど災害看護に役立つように活動していきたい。

新潟県看護協会 e-mail : saigai-shien@niigata-kango.com